

第1回「ヒヤリハットや安全の気づき、園で出ていますか？」

NPO 法人保育の安全研究・教育センター代表理事 掛札 逸美

●はじめに

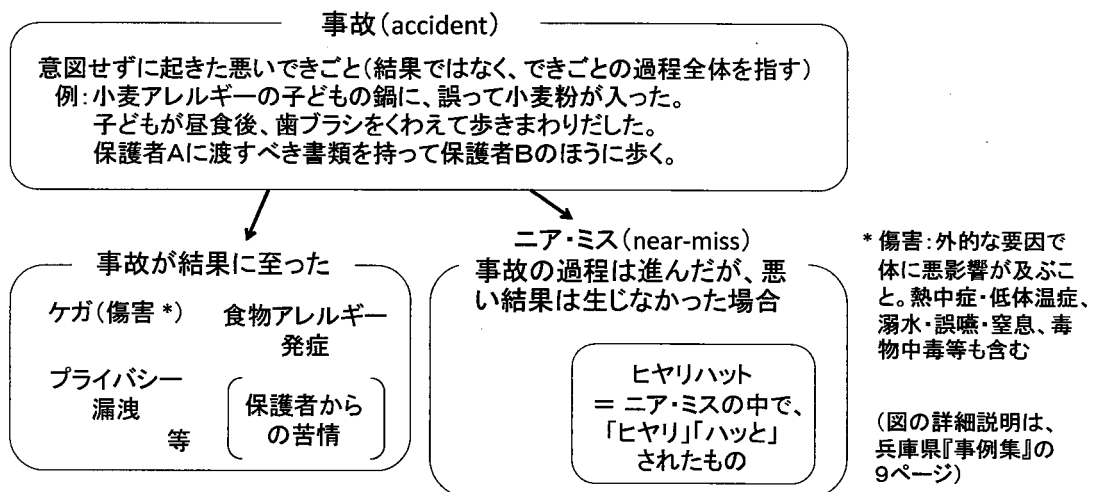
「ヒヤリハット」、保育園では日常的に聞く言葉ですね。子どもの命を奪うかもしれない深刻な危険を見つけ、子どもの命を守るため、ヒヤリハットはとても重要な情報源です。では、現場でヒヤリハットが共有され、活かされているかというところ…？ この連載ではヒヤリハットの真の価値、そして、ヒヤリハットを具体的に共有し、活かす方法をお伝えしていこうと思います。

2014年3月、兵庫県と公益社団法人兵庫県保育協会の加盟園の皆さんにご協力いただき、『保育所におけるリスク・マネジメント：ヒヤリハット／傷害／発症事例報告書』（約600件掲載）をまとめさせていただきました。連載にあわせて、報告書も園内研修などでお役立てください（※）。

●ヒヤリハットとは

まず、ヒヤリハットとは何でしょうか。事故の過程が始まり進んでしまったけれども、結果（傷害、食物アレルギー発症、プライバシー漏えい等）に至らずに済んだものがヒヤリハット…？ 残念ながら違います。それは「ニア・ミス」。ヒヤリハットは、ニア・ミスの中で「誰かがヒヤリとしたもの」「ハットしたもの」だけです（図）。

たとえば合同保育中、床におはじきやビー玉が落ちていた。それに誰も気づかずいたら、そして、そこにいた0歳さんや1歳さんが、その時は誰も口に入れなかったら…。これはニア・ミスではあるけれども、ヒヤリハットではありません。ヒヤリハットの裏側には、誰も気づかないまま子どもが危険にさらされ、でも、何も起きずに済んでいるニア・ミスがたくさんあるのです。



●誰もが同じように気づくわけではない

ニア・ミスの中で誰かが「気づいた」「ヒヤリした」「ハッとした」、これがヒヤリハット。人間はそもそも注意散漫で「つい」「うっかり」だらけの生き物ですから、気づくべき時に気づけない場合も多々あります。

そうは言っても、危険に気づくべき時にできる限り気づくためには、何よりもまず知識が必要です。知識がなければ、「これは0歳さんにとって危ないな」とは考えられません(※※)。知識だけでなく、「危険に積極的に気づこう」という動機がなければ気づくことはないでしょう。「危ないかなあ。まあ、大丈夫だよな」と思っていたら、たとえ知識があっても気づくことはできません。

つまり、ヒヤリハットや危なさの気づきは、「気づこう」という動機とそのための知識を持った職員の前でだけ起こる、一種、主観的な判断だと言えます。誰もが同じように、大事な危なさに気づき、同じようにヒヤリハットできるわけではないのです。

●情報がスムーズに流れる園に

ヒヤリハットは純粹に個人のスキルかという、実はそうでもありません。クラス、保育施設、法人、企業、自治体といった集団が持つ、リスクや安全に対する姿勢（集団レベルの意識と行動）が強気に影響します。

たとえば、保育士が「園長先生、このおもちゃ、0歳の子たちが今、すごく口の中に入れていんですけど、喉に詰まってしまうかもしれないサイズなので危ないと思います」と報告したとします。それに対して園長が「大丈夫よ、そんなの。あなたたちがちゃんと見ているでしょ！」と答えてしまったら？「そうか、大丈夫なんだ。じゃあもう、心配しなくていいや」と思う人もいるでしょう（ヒヤリハット・スキルの低下）。あるいは、「え、危ないのになあ。怖いな…。でもこれ以上、園長に言ってもムダだよな…」と思う人もいるでしょう（ヒヤリハットの情報が園の中で回らなくなる）。いずれにしても、保育施設にとってはマイナスです。

危なさの気づきやヒヤリハットの具体的な内容については次回以降、お伝えしていきます。今回はまず、気づきやヒヤリハットが職員の口からどんどん出ること（報告書に書かれること、ではありません）、そして、施設の中でそういった情報がスムーズに流れることがもっとも重要だという点をおわかりいただければ、と思います。気づきが言葉になって、共有されて初めて、ヒヤリハットや気づきは子どもの命を守る力を持つのです。

(※) 兵庫県保育協会のウェブサイトからダウンロードできます。または、報告書の題名で検索してください。(http://www.hyogo-hoikukyokai.or.jp/pdf/hoikusyo_risk.pdf)

(※※) 「保育の安全研究・教育センター」(http://daycaresafety.org/)では、子どもの安全や健康、保育に関するニュースを集め、蓄積しています。これは皆さんに事実を知っていただき、知識を持っていただくためのひとつの活動です。

掛札逸美（かけふだいつみ）：心理学博士（社会／健康心理学。安全とコミュニケーションの行動変容学）。1964年生。筑波大学卒。健康診断団体に14年間勤務後、コロラド州立大学大学院に留学、2008年に博士号取得。帰国後5年間、産業技術総合研究所特別研究員。2014年4月、NPO法人保育の安全研究・教育センター設立、代表理事。